

# 「道」

## • Back Ground

道が再生されて初めて

地域も再生されるのだ。

—仙田 満『子供が道草できるまちづくり』—

大通りから1本2本入った住宅街。そこには家々の間を縫う様に存在する「道」という人々のコミュニケーションの場があった。立ち止まって世間話に花を咲かせる人やおままごとをして遊ぶ子供達…地域の人々はその光景を微笑ましく見守り、この空間によって人や町は育てられてきた。人々は「道」に出ることで地域と触れ合い、それを通して町の様子を把握することができた。しかし今、「道」はかつての姿を失い、単なる通路と化してしまっている。その要因は社会や生活様式の変化、日本人の性質等様々であるが、その1つに高度経済成長による自動車の出現がある。これにより車が人々のコミュニケーション空間を分断し、主導権を持つことでかつて頻繁に見られていたような光景は珍しくなり、そこは人の姿のない静まり返った空間になってしまっている。その結果、日本の住区はお隣さんの顔も知らない、近所に親しい人やいざという時に頼れる人がいないという住民で溢れかえっており、それによって高齢者の孤独死のような新たな問題が出てきている。これは以前「道」によってつながれていた関係が壊れてしまっているからだ。都市化が進み、地縁の重要性が叫ばれる中、こういった現状を解決するためには、住区において家と家、人と地域を結び役割を持つ「道」が必要である。では車という側面から見て、現在の道路を単なる通路ではなく、人々の交流の場・コミュニティの場として機能する空間(=「道」)とするにはどうしたら良いだろうか。

## • Investigation 現在の道路状況を区画・道路の様子・道路という2つの視点から調査する。

(区画)



- 住戸の配置によって人のいる道とそうでない道ができてしまっている
- 幹線道路から見える住区道に人がいないため、住区自体がもの寂しい印象になっている

- …人の溜まる共有空間
- …人の溜まらない共有空間
- …共有空間(公園)

(道路の様子)



- …住宅と道路隔てる壁や植物
- …歩行者
- …自動車

- 植栽やブロック塀によって道路と住宅が分断され、道路にいる人と住宅地にいる人との間のコミュニケーションが取れない
- 車によって歩行者同士も分断されている

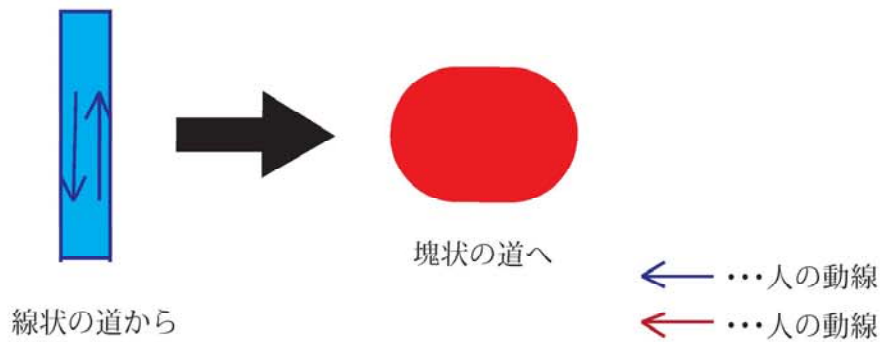
## • Concept

調査の結果を踏まえて、以下の3つの点に焦点を当てた住区区画デザインを提案し、「道」が単なる通路ではなく、住区において中心的でコミュニケーション豊かな空間となることを目指す。

## • Method

- 1 駐車場を地下に設け、対象住区内の車両交通を排除する。
- 2 従来の線状の道ではなく塊状の道を用いることで、人々の行動の自由度を拡大し、「道」をコミュニケーション空間へと変化させる。

(Diagram)

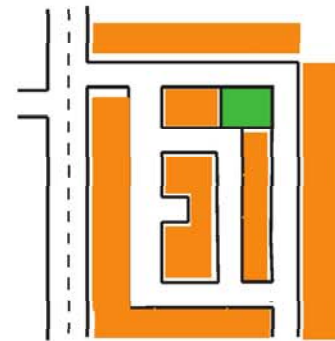


- 3 「道」の交わる箇所にその住区に合った公共施設を設けることで、人の溜まる空間を作りだし、コミュニティを活性化させる。

## • Example

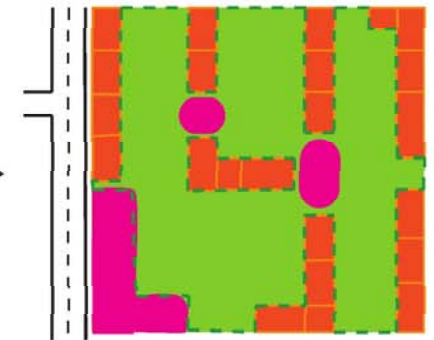
今回は、新生児や低学年の子供が多く住んでいて、教育や保育に力を入れている町の住区を対象地として公共施設等を提案する。

<Before>



…住戸 …公園

<After>



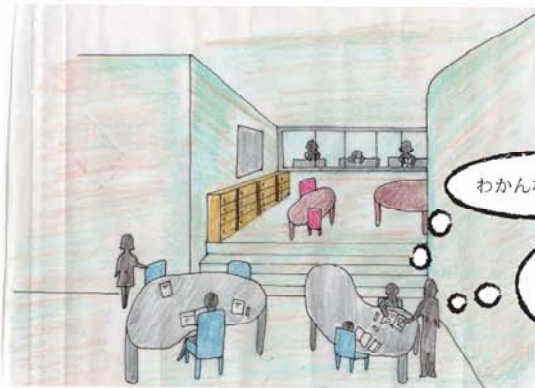
…公共施設 …「道」となる空間

\*上図はイメージ図

(施設例その①: 町のこもり部屋)

・住民の学習場所

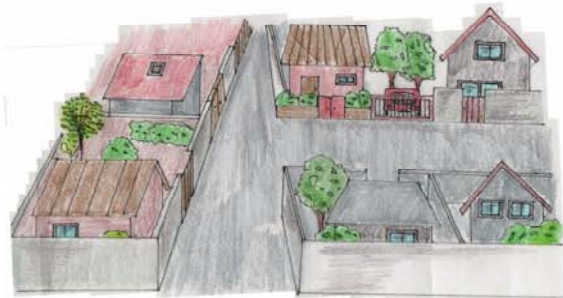
→テレビやゲーム、漫画といった誘惑に勝てず、思うように自宅で学習や仕事ができない人達の学習場所として利用してもらおう。



(「道」の様子)

「道」にはその住区に応じて子供のための遊具やベンチ、住民共同の花壇などがある。ここでは住民が「道」をどう使うか、そこでどう過ごすかによってその住区の印象が変わってくる。町の表情を作るのは人だ。

<Before>



<After>



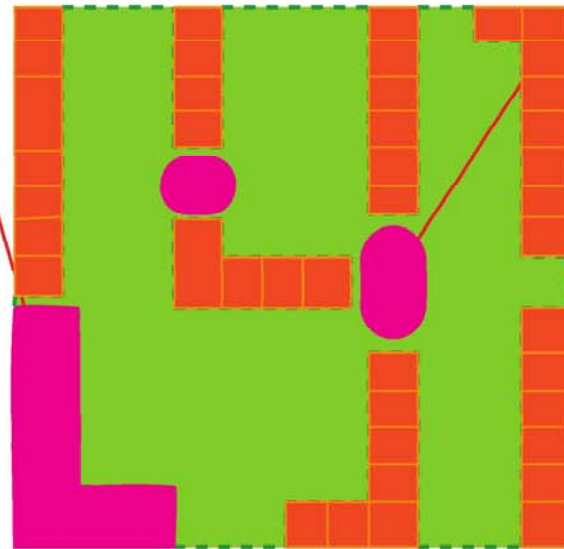
(施設例その②: 町のカフェテリア)

・住民の憩いの場

→子育て中のお母さん達が子供を遊ばせながら雑談のできる場。勿論、このカフェも「道」の一つで通り抜ける人とカフェにいる人が同じ空間を共有する。

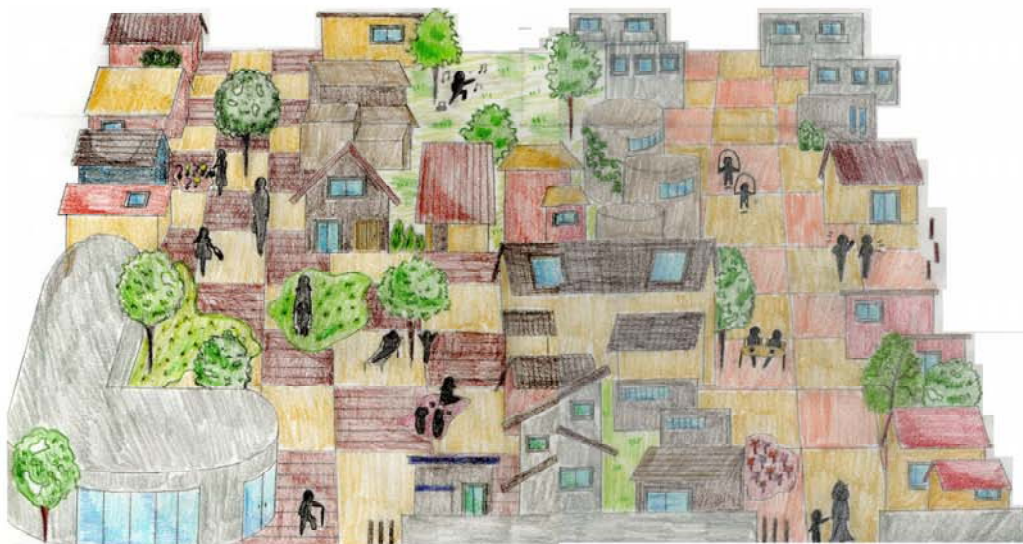


まだ遊んでたのか？  
あんまり遅くなるなよ。



●...公共施設 ●...「道」となる空間  
■...住戸

- 子供が自動車の通行を気にすることなく、安全に遊ぶことができる。  
(母親にとっても安心)
- 車を使わないことや施設を一箇所に集中して配置しないことによって、運動不足の解消や気分転換につながる。
- それまで公共の場として誰も手を出せなかった道路空間に自分の居場所ができることで、自分の住んでいる住区に愛着が生まれる。
- 近隣住民と顔をあわせる機会が増えることで、町の異変に気づくことができ、孤独死のような周囲とのコミュニケーション不足によって起きる問題を防ぐことができる。
- 「道」や施設での交流によって近隣住民同士の結びつきが強くなり、町としての団結力が高まる。
- 「道」の使い方や施設の外観や種類によって、その住区の個性を出すことができる。



\*スケッチはイメージ

## • Last...

ある調査のアンケート結果によると SNS を「SNS 上で知り合った人とコミュニケーションをとる」という目的で利用している人の割合は 29.4%、また別の調査では「対面よりも SNS での社交に割く時間の方が長い」という人の割合が 39%にもなることがわかった。両者共、数年前には間違いなく一桁、あるいは 0%に近い数字だったはずだ。これらに該当する人の多くが「周りに仲の良い友人がいないから」「地方から出てきて近所づきあいがなく寂しいから」という理由を挙げている。このことから分かるように、現在の日本の住区には近隣住民と積極的に関わりたいと思っても簡単にそうすることができない状況が多数存在している。この提案はそのような人々のジレンマの解消を始めとした住区コミュニケーションの改善のための 1つの方法として作成したものであり、これからの住区のありかたを考える際の手がかりとなれば幸いである。

(参考)

- opi-net <http://www.opi-net.com/>
- マイナビニュース <http://news.mynavi.jp/>